

氏名(本籍)	あおきひでお 青木秀男(広島県)
学位の種類	博士(社会学)
学位記番号	博乙第1600号
学位授与年月日	平成12年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
審査研究科	社会科学研究科
学位論文題目	現代日本の都市下層 —寄せ場に繋がる人びと—
主査	筑波大学教授 博士(社会学) 駒井 洋
副査	筑波大学教授 博士(社会学) 菱山 謙二
副査	筑波大学助教授 土井 隆義
副査	大阪市立大学教授 博士(文学) 森田 洋司

論文の内容の要旨

本研究の目的は、現代日本の都市下層、具体的には、寄せ場に繋がる日雇い労働者および野宿者、外国人労働者に対象を絞り、その客観的な存在様式を構造論的に把握するとともに、差別に対応する主観的な存在様式を意味論的に把握しようとするにある。ここで寄せ場に「繋がる」とは、本研究が、寄せ場に直接に関わらなくとも寄せ場の動向に深く影響されている、駅や公園に起居する日雇い経験をもたない野宿者や下層の労務職種に就労する外国人労働者なども包含しているからである。

客観的な存在様式については、経済のグローバル化の結果として産業構造が変容し、それにとまって日雇労働市場が縮小して日雇い労働者が排出され、野宿者が増加するという基本的な構造が指摘される。また、主観的な存在様式については、都市下層の心像世界の動的過程が描かれる。

本論文は、都市下層の客観的な存在様式についての理論的枠組みを提示する第1章、中枢都市における都市下層の客観的な存在様式そのものを実証的に検討する第1部、都市下層の主観的な存在様式を理論的、実証的に解明する第2部、周辺都市における都市下層の客観的な存在様式を実証的に究明する第3部から構成されている。

第1章では、収奪する先進国—収奪される途上国という従属理論的視座および途上国都市研究の過剰都市化論にたいして、J. フリードマンおよびS. サッセンらに依拠しながら、世界都市論的視座の優位性が主張される。世界都市化の進行により中枢都市は資本・情報・労働の国際および国内流通の中継基地となり、産業構造に変化をもたらす。すなわち、一方では製造業の比重が後退し建設・土木業が停滞するとともに、他方では新たなサービス業職種が群生してサービス産業が膨張する。産業構造の変化にとまなう労働市場の変化によって、ビジネス・エリートと非熟練・低賃金の縁辺的労働者への階級的分極化が起こる。こうして出現する都市下層については、アメリカの最下層黒人をアンダークラスとして概念化したW. ウイルソンの議論が援用されている。

「都市下層の存在様式」と題される第1部は、釜ヶ崎を対象とする第2章、寿町を対象とする第3章、野宿者を分析する第4章、外国人労働者を検討する第5章の四つの章から構成されている。第2章と第3章では、寄せ場の労務手配機能が後退し、日雇い労働者が現役でありつづけることが困難となり、たえず野宿者への下降移動圧力にさらされていることが明らかにされる。第4章をみると、野宿者の出身階層は、寄せ場労働者からの下降異動者のほかに、不況にとまなう企業の倒産やリストラによる失業者および零細企業の労務職種や製造工場の派遣・期間労働者などの都市の不安定就労層からいきなり野宿化した者の存在が注目されている。また第5章では、と

りわけ建設業における就労と在日コリアンとの関係を重視しながら、外国人労働者が増加率を低減させながらも定住化の道を歩み、その過程で階級的分極化が進展しその一部は野宿者にさえ参入しつつあることを明らかにしている。

「都市下層の意味世界」と題される第2部は、都市下層の研究手法として生活史に着目する第6章、寄せ場労働者にたいする差別とそれにたいする労働者の意味世界を検討する第7章、釜ヶ崎の越冬闘争を宗教儀礼的に分析する第8章の三つの章から構成されている。第6章では、生活史法の検討を通じて仮説とデータの往還およびデータ解釈の方法論的提示がおこなわれる。第7章では都市下層の差別の構造が明らかにされるとともに、被差別の境遇における都市下層の主観的意味世界が分析され、それが全体社会の下位文化であるとともに対抗文化でもあることが主張される。第8章ではヴァン・ジュネップやV. ターナーの宗教社会学における儀礼分析を援用しながら、日雇い労働者および野宿者の意味世界を、〈ミジメ〉と〈ホコリ〉の両極の間の動的な過程として把握する。

「周辺都市の底辺から」と題される第3部は、広島都市部を対象とする第9章と、マニラの都市貧困層を対象とする第10章から構成されている。第9章では地方中核都市における都市下層の変容が、また第10章では途上国の首座都市における都市貧困層の変容が、それぞれ日本の中枢都市の都市下層の変容に照応するものであることがみだされている。とくに第9章では、都市部の変容について、第二次大戦敗戦まで、1978年までとそれ以降の三つの時代区分がなされ、1978年以降サービスや日雇いへの就労が出現したことが述べられる。このように、第3部は第1部で展開された中枢都市の都市下層の研究を「周辺」から補強しようとするねらいをもつものである。

審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文は、つぎの諸点で都市社会学研究に大きな貢献をなしとげている。

- (1) 寄せ場に繋がる日雇い労働者、野宿者、外国人労働者の有機的連関を構造的に解明した。とりわけ野宿者の激増は大きな社会問題となっており、その実態が明らかにされたことの意義は大きく、従来の都市の構造的分析を大きく前進させるのに多大な貢献をしている。
- (2) 都市下層の主観的存在様式について、〈ミジメ〉と〈ホコリ〉という心像を概念化し、その動的過程の分析に成功した。
- (3) 理論的枠組みとして世界都市とアンダークラス論及び宗教社会学的儀礼分析を採用し、日本の代表的寄せ場を対象としてその妥当性を実証した。

ただし、客観的存在様式と主観的存在様式との理論的つながりがやや弱く、また必ずしも体系的とはいえない部分も散見されるが、本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。